
横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム 平成30年度 実施レポート

- 横浜市立 新吉田第二小学校 × 西井夕紀子 1
アシスタント：あだち麗三郎、野田薫

- 横浜市立 北山田小学校 × アンサンブル・ノマド 2

- 横浜市立 南希望が丘中学校 × 花崎攝 3
アシスタント：開発彩子

- 横浜市立 上菅田特別支援学校 × 宮内康乃、定方まこと 4

- ハートフルルーム十日市場 × 福留麻里 5
アシスタント：白井愛咲



横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「音楽」

横浜市立新吉田第二小学校 × 西井夕紀子 自分の気持ちや想いを音楽にする体験

担当アーティスト	西井夕紀子（作曲家）／アシスタント：あだち麗三郎（音楽デザイナー）、野田薫（シンガーソングライター）
実施校	新吉田第二小学校（港北区）
コーディネーター	認定NPO法人STスポット横浜
実施科目・教科名	総合的な学習の時間、音楽
実施概要	体験型／作曲／4学年1学級27名
実施日程	2018年11月22日（木）、2018年11月29日（木）、2018年12月6日（木）、2018年12月17日（月）



授業のねらい

総合的な学習の時間で取り組む「福祉」から学んできたことを、一つの音楽（オリジナルソング）としてつくりあげ、表現すること、創造することを通して、福祉の学びも深められるとよい。

主な内容

<1日目>自己紹介とアーティストによる演奏を披露。声を出す、歌うための準備体操と声まねをして声を出すことに慣れていった。つくりたい曲のイメージを出し合い、3グループに分かれて小さな曲を試しに創ってみた。<2日目>教室にある物や楽器を使って「音を使って人と話すように」即興のセッション。3グループに分かれて「自分の大切なもの」をテーマに気持ちや想いを言葉や詩にしていった。<3日目>3グループに分かれて、曲想やメロディーのアイデアを出し合って創作。<4日目>3グループそれぞれでできた歌のパーツを、アーティストの方で組み合わせて一つの曲にしたものを、全員で練習。打楽器やリコーダーなどのアレンジも加えた。

アーティストから

事前に授業を見学させてもらった際、好きなように踊りながら歌うなど、それぞれ自由だけれども不思議と溶け合うすばらしい合唱を聴かせてくれた子どもたち。普段から調和や思いやりを大切にしている様子が音楽に表れていました。クラスの曲作りにおいては音楽家の立場からできることを考え、みんなと違って大丈夫、自分の視点を歌詞にしていこうと呼びかけました。楽器のアレンジも含め、一人ひとりの選択が作品を形作っていくこと、ふと思いついたことや何気ない言葉が音楽になっていく面白さを少しでも共有したいと思いながら過ごしました。

コーディネーターから

4年生のうち1クラスだけでの実施だったため、先生の計画された総合的な学習の時間と密に連携した取組となりました。「福祉」というと教科書的な言葉に寄りがちですが、「自分の大切なもの・自分にとって一番幸せに感じること」から考えることで「その子にしかない言葉」を引き出していきました。子どもたちの「こんな感じ」という言葉にならないところを写しとれるのが音楽。子どもたちの鼻歌や身体の動き、連想ゲームのように出てくる言葉やアイデアを、アーティストたちが丁寧に拾い上げて音楽にしていきました。小グループで対話しながらの創作だったからこそ、自分のアイデアが音楽に反映され、自信・満足感のある表現となったようでした。

先生から

教師は、ねらいや目標があって、そこに子どもを導くことが多いです。しかし、アーティストの方は子どもの自由な発想をそのままひろって音楽にくださったので、子どもたちも、ゆったりとそして子どもらしく目を輝かせていました。プロの方の音楽との向き合い方に触れることができ、本当に幸せで豊かな時間でした。簡単な音楽づくりや身体を使った表現をする場面もあり、新鮮でした。

子どもたちから

音だけで会話したとき、楽しいっていう感情がたまった感じだった。／アーティストの方と楽しく作れた。／作曲家の方と会えてうれしかった。／家でも作曲してみたい、もう一度やりたい。／自分の気持ちから曲をつくれることがわかった。



横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「音楽」

横浜市立北山田小学校 × アンサンブル・ノマド 音を探す、創る、作品にする

担当アーティスト	アンサンブル・ノマド（現代音楽アンサンブル（佐藤紀雄、木ノ脇道元、花田和加子、宮本典子））
実施校	北山田小学校（都筑区）
コーディネーター	認定NPO法人STスポット横浜
実施科目・教科名	音楽
実施概要	体験型／現代音楽／4学年2学級64名
実施日程	2019年1月15日（火）、2019年1月23日（水）、2019年2月4日（月）、2019年2月12日（火）



授業のねらい

声や身体などを使って、精一杯表現できた達成感や、仲間と一緒に頑張れたという一体感を味わいたい。異なるアイデアや意見を持っている人たちで、ひとつのものを創るということの面白さや醍醐味のような部分を体験できるとよい。

主な内容

<1日目>自己紹介。身の周りの音（好きな・嫌いな音、楽しくなる音、ワクワクする音など）を思い出す。音響劇「ごんぎつね」をつくるための、音や楽器のアイデア出し。<2日目>1分間耳を澄まして聴いてくる音を書き出してみるワーク。グループに分かれ、担当の場面に相応しい音はどんな音か、アーティストがつくってきた創作楽器なども参考にしながら、アーティストとともにアイデアを出し合った。<3日目>グループごとに朗読と音を実際に一緒にやってみて、気づいたことやもっとこうしたら良いと思ったことなどの振り返りをした。<4日目>はじめにクラスごとにリハーサルをし、それぞれのクラスの音響劇「ごんぎつね」を観合った。その後アーティストより、同じく国語の教科書にある「のはらうた」の詩の朗読と、それに音楽をつけた演奏を披露した。

アーティストから

いつもやるように自ら演奏するのではなく、子どもたちに「楽器を制作し、朗読の効果を高めるべく適切なタイミングや強さで音を入れていく」という複雑なことを、「音に耳を傾ける」という意味合いも含めて理解させて進めるのは大変に緊張を伴い、また神経も使うワークショップでしたが、正確にディレクションできれば、小学4年生くらいの子でも期待された課題をなし得るのだということを（ディレクションしきれず到達できなかった部分も含め）学ばせてもらった4回のワークショップでした。（木ノ脇）今回4年生に教科書の題材「ごんぎつね」に音をつけて音響劇に仕上げる課題を4時間で行った。はじめに「音を探す、つくる、選ぶ」ことを伝えた。4時間で仕上げなければならなかったため、大事なこの点に多くの時間を割けなかったのは反省点。だが、児

童たちは文章を理解し自由に音を見つけ選び、互いにタイミング等を工夫し、一つの素晴らしい作品を創り上げた。最後に私たちが教科書の詩に音楽をつけて聴いてもらったのも今回のワークショップの意味につながったと思う。（宮本）

コーディネーターから

しばらくぶりに学校に何うと調理器具やじょうろを持ち出してきた子どもたち。その「楽器」にたどり着くまでに、どれだけ物を鳴らしてみただろう。その時間こそ、上手く演奏することとは異なる価値観で音と向き合う、豊かな創作の時間だったと思います。最後にアンサンブル・ノマドによる「のはらうた」の詩の朗読と音楽を付けた演奏とを聴いた子どもたちの感動の眼差しは、自分たちが「ごんぎつね」で挑戦してきたことの延長線上に、こうした音楽があるのだということも認識した瞬間にも見えました。盛りだくさんの内容、インフルエンザによる多数の欠席も続き、日々の子どもの取組状況や、子どもたちの力でどこまで創り出せるのかが捉えきれず、結果的に先生方に補完していただいた点が多くなってしまったことは反省でした。

先生から

何を子どもたちに求めるかは明確でした。結果的にも子どもが音探しや音の入れ方に積極的になりました。ただ、4回の授業をどのように組み立てていくのか、また、それぞれの回または全体で何の力をどうつけていくのが教師側にも具体的に共通理解できていると効果的だったのかもかもしれません。最後に「のはらうた」の演奏があったのはとてもよかったです。活動のはじめにもそんな機会がちょっとでもあるとさらに主体的に活動に入れたかとも思いました。

子どもたちから

楽器を考えたり作ったりするのがたのしかった。ぴったりの音を見つけた時うれしかった。／となりのクラスではぜんぜん違う音を使っている感じがすごかった。／最後ののはらうたの演奏は迫力があってすごかった、自分たちものはらうたでもやってみよう。



横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「演劇」

横浜市立南希望が丘中学校 × 花崎攝 本来持っている力を引き出す演劇の力

担当アーティスト	花崎攝(シアター・プラクティショナー、演劇デザインギルド)／アシスタント：開発彩子(演劇デザインギルド)
実施校	南希望が丘中学校(旭区)
コーディネーター	認定NPO法人STスポット横浜
実施科目・教科名	自立活動、生活
実施概要	体験型／創作／個別支援学級 11名
実施日程	2018年10月24日(水)、2018年10月31日(水)、2018年11月28日(水)、2018年12月5日(水)



授業のねらい

演劇を通して、声を出すこと、動きで伝えることを学ばせ、自分らしさを表現させたい。集団に入ることが苦手な生徒もみんなと一緒に頑張ったね、楽しかったねと思えるような体験活動。

主な内容

<1日目>簡単に自己紹介。複数のコミュニケーションゲームの後、ボールを隣の人に渡していくワーク。目を見て渡す、重いもの・熱いものだと思って渡すなど見立てて遊ぶ。ちょっとした即興演劇をやってみる。<2日目>コミュニケーションゲームや、なべなべ底抜けなど人数を増やすにつれて協力を必要とするゲーム。4つのグループに分かれ「あるスポーツ選手の1日」と題し、グループでの小さな演劇を創作した。<3日目>簡単なコミュニケーションゲームの後、アーティストより「聞き耳頭巾」の物語を聞き、やりたい役と名前を全員で決めて演じてみた。<4日目>聞き耳頭巾のあらすじを、魔法使いや電車の運転士、船長など、子どもたちがなりたい役を加えた物語にアレンジ。布や画用紙で簡単な衣装や小道具を作成し、大まかな物語の流れを共有しながら即興で演じてみた。

アーティストから

エンゲキはルールのある遊びとも言える。遊びだからこそ学べること、いつもは隠れている力が引き出されることがある。学校では規律に合わせることで評価されるが、違うルールのもとで、子どもたちはまた違う顔を見せる。ファンタジーの世界には違うルールがあり、それを共有しながら、中学生たちは素晴らしい対応力、的確な想像力を発揮した！とっても楽しかった時間が、彼ら

の本来持っている力を垣間見せ、本人にも先生や保護者にも、小さなドキドキや驚きをもたらしてくれたのでは…と思っている。

コーディネーターから

実際にはないボールをあるように振る舞うなど、イメージをして演じることや、人物や動物を演じる際の彼らの観察力、それらしさを表現する力には目を見張るものがありました。また、あらすじを脱線して巻き起こる突発的な事態にも、その役なりに臨機応変に対応する力をみせ、笑いや驚きの連続でした。スポーツ選手、魔女、船長、電車の運転士など、好きな役に思う存分なりきる、その役の自分を周りが認めて振る舞ってくれる、そうして人と関わる体験を心から楽しんでいました。発想力豊かな彼らによる楽しい物語が展開し、子どもたちの本来持っている力を垣間見せ、本人にも先生方にも、小さな驚きをもたらしたようでした。

先生から

いつもの授業では見ることのできないすてきな笑顔を見ることができました。また、生徒それぞれの発想や個性を大切にしていたいただきありがとうございます。自分を表現することが苦手な生徒たちですが、「劇」というきっかけで好きなように表すことができて良かったです。行事や保護者からの要望などで日程を調整することが難しいと感じました。

子どもたちから

オズのまほうつかいの劇のときに自分から楽しめたのでよかったです。／次もし機会があれば悪い魔女をやりたい。／きき耳ずきんとヤドカリゲームとなべなべそこぬけがとても楽しかった。



横浜市芸術文化教育プラットフォーム・学校プログラム「音楽」

横浜市立上菅田特別支援学校 × 宮内康乃、定方まこと 身体で感受し発する微細な表現に寄り添う

担当アーティスト	宮内康乃（作曲家）、定方まこと（オイリュトミスト、ダンサー）
実施校	上菅田特別支援学校（保土ケ谷区）
コーディネーター	認定NPO法人STスポット横浜
実施科目・教科名	カルチャーA
実施概要	体験型／創作／高1～3 学年 15名
実施日程	2019年1月15日（火）、2019年1月22日（火）、2019年2月5日（火）、2019年2月7日（木）



授業のねらい

「感覚を媒体とした身体意識の形成」「社会性、認知、コミュニケーション能力の拡大」を重点に、声によるアプローチと、生徒たちの微細な身体の動きに寄り添う活動を通して、彼らの発信する微細な表現とそれを受け取る側の感覚を開き、感覚や空間を共有できるような体験を楽しむ。

主な内容

<1日目>輪になって一人ひとりの名前を歌うように呼んでいき、次に声を出さずに身体の動きで呼びかけてみる。呼吸の吸うと吐くを意識してゆっくり行い、スーと静かな息の音に意識して耳を傾ける。<2日目>母音だけを伸ばして発声する倍音声明。生徒たちに先生の喉や身体に触れてもらい、振動を感じながら母音の音の違いを身体の動きからも認識できるような活動を行った。<3日目>母音の音のイメージの違いを意識しながら発声してみる。母音のみでつくった短い歌を先生たちに歌ってもらい、それにゆったりとした動きを付けて歌と動きの空間をつくった。<4日目>これまでの活動の要素を一つの流れのパフォーマンスにしてみた。森の音を声でつくる場面では、生徒の発するさまざまな声や音も風景となり神秘的な雰囲気となった。

アーティストから

上菅田の生徒さんたちとのワークショップは私にとって夢が叶った嬉しい機会でした。とても微細な表現に静かに深く反応してくれる彼らとの対話を通して、いかに私たちの方が不自由で不器用であるかを実感させられ、言葉や表情ではなく、思いをエネルギーとして伝えるだけで十分伝わっていたり、微細な子音の響きを自ら発して表現してくれたことは忘れられず、4回を通して徐々に浸透し響き合っていたのはとてもかけがえのない体験となりました。（宮内）

一番初めに見学に向った時、まず先生方と生徒さんたちがつくり出している場の空気の様子が純粋さに衝撃を受けた。およそ、錯綜する情報に日々翻弄されている我々健全な大人はつくり得ない空気感。

その純粋さはそのままに、何とか自分の持っている身体言語との間に橋を架けられないかと考えていった時あらためて、今の時代に見過ごされがちな、身体で感受することと発することという、人間の根源的な部分に向かい合うことができたと思う。（定方）

コーディネーターから

声と身体を通して、生徒たちの感覚にこちらが寄り添ってみることで見えてくる世界と一緒に感じたいと考え、宮内さんと定形さんにワークショップをお願いしました。みんなで目を閉じて宮内さんの出す音を真似しているとき、いつの間にか一人の生徒が宮内さんに代わり、音のお手本を示しはじめました。みなそれに気が付かずしばらく先生と生徒が逆転するような現象が起こったのですが、そう仕掛けた訳ではなく、自然と起こったということがとても尊く感じました。また、母音一つ一つの音のイメージの違いを身体で感じることを丁寧にやりましたが、普段使っている意味を持った言語から離れて、人類共通の身体言語の感覚を取り戻すような体験となりました。

先生から

生徒たちにとって一番身近である「名前」に着目し、毎時間同じ流れで活動を進めたことで、見通しや期待感を持って活動に取り組むことができたと感じました。言葉を使わずに身体で表現したり、心で受け止めて表現したりする活動では、生徒たちが大人以上に刺激をキャッチして、表情や発声など、自分なりに意思を表出する様子が見られ、生徒の新たな姿を発見することができました。また、生徒自身が発する声や音、呼吸、身体の動きなどを取り上げたことで、その場にいる全員で作り出す空間が非常に幻想的で、これまで味わったことのない雰囲気でした。生徒たちだけでなく教員にとっても貴重な経験となりました。授業ごとにコーディネーターさんとアーティストの方と振り返りの場を設けたことで、生徒にとって有意義な学習へとつながったと感じました。



ハートフルルーム十日市場 × 福留麻里 自分の身体に耳を澄ます時間

担当アーティスト	福留麻里(ダンサー・振付家)／アシスタント：白井愛咲(ダンサー)
実施施設	ハートフルルーム十日市場(緑区)
コーディネーター	認定 NPO 法人 S T スポット横浜
実施科目・教科名	体育
実施概要	体験型／コンテンポラリーダンス／中学 1～3 年生 8 名、支援員ほか 7 名
実施日時	2019 年 1 月 17 日(木)、2019 年 1 月 24 日(木)、2019 年 1 月 31 日(木)



授業のねらい

やったことのない活動に触れ、自分が楽しめることを見つかる機会としたい。身体を動かして、いつもの景色がちょっとちがって見えてくるような体験をさせたい。

主な内容

<1日目>身体をほぐす。ダンサーの動きを真似して身体を動かす。いろいろな1分間(1分耳を澄ます、1分かけて立つなど)。ペアになって相手の動きを真似る。今日1日の過ごし方を身体で伝えてみる。

<2日目>身体をほぐす。ダンサーの動きを真似して身体を動かす。いろいろな1分間(耳を澄ます、自分の身体の状態を感じるなど)。空間に自分の名前を書く。いろいろな場所や向きに名前を書いて、空間を見えない名前の線で満たしていく。

<3日目>身体をほぐす。空間に身体のいろんな部分で名前を書く。空間に線を描いて飛び越えたり、円を描いてくぐったり、扉を描いて通ったりしていく。他の人の線でも遊んでみる。

アーティストから

同じ空間に一緒にいること。そのことだけで、私たちは言葉を発さなくてもたくさんの受信と発信をしている。当たり前のように見えて、見過ごしてしまいがちなことだと思う。ハートフルルームで出会った中学生たちは、そのことを無いことにできないタイプの人達に感じられた。身体を巡る取組の中で、中学生たちが少しずつ見せてくれる表情や身体の状態の変化、教室に漂う繊細な空気を通じて、その見過ごしてしまいがちなことに、こちらが強く気付かされ3日間だった。

コーディネーターから

自分の身体に耳を澄ませるような時間をたっぷりとして、自分の身体がどうあるのが心地よいのかをいろいろと試してみる、「ダンス」というよりも「保健体育」という位置づけのような時間でした。誰かに注目されているなかで自分を表現することはハードルが高いけれども、間違えはない、笑われないという安心感のなかで「自分で選択して動く」ことを重ねることに意味があったと思います。自分がした動きから人と関わるといふ仕掛けにより、徐々に人の動きも視界に入りつつ、自分も人の視線を気にせず動けるということが可能になっていきました。ふと我に返ってみると、みんなが思い思いに動いているその動線が面白い。そんな新鮮な気付きをもたらすのがアートの力だと改めて感じた取組でした。

担当職員から

○学校現場とは違い、難しい条件が重なっている中、丁寧に計画をし、授業を実現していただいたことに感謝しています。
○ハートフルに通室している子どもたちは、特別な行事(校外活動等)に興味を示す子がいる一方で、なかなか一歩踏み出して参加することが難しい子がたくさんいます。今回のように、「日常の一場面として、ルームの教室でできる豊かな体験活動」という枠組みは新しく、今後の発展につながるのではないかと思います。
○アーティストの方はもちろんですが、コーディネーターの方もフレンドリーだったのがよかったです。子どもたちは自然に大人同士の関係性を見えています。アーティストとコーディネーター、支援員、専任教諭、指導主事が、仲良く笑いあえる雰囲気は、子どもたちにとって何よりも安心できる環境になったと思います。
○自分自身運動は好きですが、「表現」することは苦手意識があります。どんな動きをしても(場合によってはしなくても)怒られない、笑われない、ばかにされない安心感がありました。ある意味では「何でもあり」という条件は、子どもにとっては、実は難しいことなのだろうと思います。そんな「課題」に子どもたちが笑顔で取り組めたことが何よりの成果だと思います。

子どもたちから

日頃の何気ない動きを踊りにするというのは新鮮な気持ちだった。使うことが少ない身体の部分を動かして良かった。／全部ダンスらしくない動きで驚いた。／恥ずかしかったけど笑いも生まれてよかったと思う。次に入ってくる人にも体験して欲しい。／いつもは使わない体力や汗をかいて不思議な気持ちになった。